

「my binta, your binta // lol ~ roars from the skinland ~」
 2024年3月1日 (金) 19:30、3月2日 (土) 15:30、3月3日 (日) 15:30
 ヒルサイドプラザ (東京都渋谷区猿樂町29-10ヒルサイドテラス内)
 定員: 各回100名 (事前申込制、先着順)
 観覧料: 無料
 申込み: <https://ccbt.rekibun.or.jp/events/skinland>

contact Gonzo 新作パフォーマンス
 「my binta, your binta // lol ~ roars from the skinland ~」
 2023年度 CCBTアーティスト・フェローであるcontact Gonzoによるプロジェクト。体全体を覆う触覚を司る器官であり、他者との境界・接点である「皮膚/スキン」について、改めてその仕組みを多角的に探求し、新たなパフォーマンス作品を制作する。パフォーマンス作品としての発表とあわせて、リサーチや実験のアーカイブ公開、専門家を招いたオープンレクチャー等を実施。また、触覚を再現するデバイス開発により、共有可能な接触交感的パフォーマンスを目指します。「接触で起きる痛みとは何か」など、触れるという行為が持つ情報の理解とその共有を試みます。

※ 本作は、シビック・クリエイティブ・ベース東京 [CCBT] 「アート・インキュベーション・プログラム」の一環として制作しています。

運営 2023/12/13 19:04
 contact Gonzo
 「my binta, your binta // lol ~ roars from the skinland ~」
 メンバー紹介

パフォーマンス: contact Gonzo
 塚原悠也 @ゴソソの塚原
 ミケ尻敬悟 @ゴソソのミカヅリ
 松見拓也 @ゴソソの松見
 NAZE @NAZE

コンセプトサポート: 津田和俊 @YCAMの津田

舞台監督 | 河内崇 @Kawachi
 音響設計 | 西川文章 @Bunsho
 音響オペレート | 溝口結美 (ナンシー)
 デバイス設計 | 稲福孝信 @HAUSの稲福
 照明デザイン | contact Gonzo
 テクニカルサポート | 伊藤隆之 (CCBT) @CCBTの伊藤
 ビジュアルデザイン・衣装 | 小池アイ子 @アイ子
 トロウイングアーカイブ | NAZE

制作・進行管理 | 林慶一 @運営、岩中可南子 @運営_kanako
 Iwanaka、島田芽生 (CCBT) @CCBTのshimada
 協力: happy freak (編集済)

YCAMの津田 2023/12/02 14
 メモ: Gon蔵 (編集済)

Piezoelectric materials for flexible and wearable electronics: A review
<https://doi.org/10.1016/j.mates.2021.101564>

my binta, your binta // lol ~ roars from the skinland ~

CONTACT GONZOのパフォーマンスはたぶん実際にやっているのが一番面白くて、見て頂くより一緒にしてしまえばいいかなって思っています。言わなければ僕が10倍くらいの大きくなって行うパフォーマンスをご覧頂くようなので、巨人が発生させる波しぶきをかぶり巻き込まれ、あわよくばその波でサーフィンして頂きたいと思っています。皆様におかれましては目から耳から皮膚から存分に浴びて頂き盛り道を忘れたいボーとして電車を乗り過ごしたりして頂きたいと切に願います。

それからも皆様の中にスポーツ関係者、角界関係者などいらっしゃるれば、この試みをスタジアムやリングや土俵に持ち帰って頂き、観戦体験のアップデートを願って頂きたいです。張り手で揺れる升竜とかタックルの衝撃波で観客が吹っ飛ばす客席が実現できるのならば、もはや観戦は安全な娯楽でなく緊張感で冷や汗の出る新たな遊びとなるのではないのでしょうか。

Perhaps the most interesting way for you to appreciate a contact Gonzo performance is to actually try it with us firsthand rather than just watching, and if we could all reach a state where we can no longer suppress our laughter at the disconnected face slaps after shoving, trying to push and climb onto each other, running and colliding with each other, becoming drenched in sweat, striking one another and realizing while doing so the blurred meaning of our actions, bodies too occupied to react, then that is honestly the quickest and surest way to "share sensations."

But in order for 100 people to perform contact Gonzo simultaneously, we would have to go through a certain number of steps and clear various hurdles, and so this time we decided to amplify our performance using the power of technology to allow the audience to literally bathe in it with their whole bodies.

Put simply, the impacts and pain that we feel (and inflict) during our performance will be converted into sound (bass) and amplified through a subwoofer called "Function One" and the resulting waves directed at you the audience.

It will be like watching us perform as giants ten times our original size, and we hope you will get caught in the spray generated by the giants, and perhaps even surf the waves. We sincerely hope that you will be soaked from your eyes, ears, and skin, and might even forget your way home or miss your train as you leave in a daze.

If any audience member is in the sports industry or sumo world, we hope you will take this experiment back to the stadium, ring, or sumo ring and update spectators' experience of watching a match. If it is possible to create seats that sway with the tension of a slap, or seats that are blown backward with the shock wave of a tackle, then watching a match will no longer be a safe pastime, but a new kind of entertainment that will make spectators break out in a cold sweat from the intensity.

by contact Gonzo

The Skinland Times

Free ¥0 ISSUE.0 March 1-3, 2024



スキンランドへの入り口 撮影:コナクティカ・ゴソソ

roars from the skinland / the novel

事故 (day 01)

旧式の車の運転にずっと苦勞していたメンバーは地図を見ながら運転をしていたために前の車に追突してしまいました。例の場所まであと3分ほどの場所です。私たちは残っていた時間が少なく、そのせいでかなりの速度が出たので運転席のメンバー以外は車外に放り出され、歩道の上まで吹っ飛んでいました。肉ドーナツもです。ガーゼにくるんで車内で浮かせていた肉ドーナツが、血みどろになりながら転がっていたときはもう終わったとさえ思いました。私たちは永久にここに残ることになるのだらう、という覚悟とともに、これまでの犠牲にすべて負けたんだという絶望的な気持ちになりました。こういった状況に陥ったのはチームのリーダーでもあった私の責任は大きいです。他のメンバーが肉ドーナツを捨てた状況を確認していました。ダラダラとした液体がこぼれ落ちるなか、ガーゼをゆっくりはがしていききました。他のメンバーは証拠を消すために事故を起こした車両を燃やして始末したのですが、いかにせん夕方の「ダイカク山」と呼ばれる土地は人も多く、携帯電話で撮影されたりしながら、この事故現場はかなりの大ごとになり始めていました。



「肉ドーナツ」 絵師によるもの

肉ドーナツ

運転をしていたメンバーが肉ドーナツを確認してくれていたようです。もし肉ドーナツが無事なら、このまここから目的地までおそらく走って行けるだろうと思い、肉ドーナツを含めた3人のメンバーを集めました。肉ドーナツを浮かせていた小型モバイル・グラビティのバッテリーもまだ残っていたので、こ

に構築した広大なスキンランドを車で走り始めます。空間拡張技術を使い、500キロ四方ほどの土地を古今東西の増殖した皮膚で覆っています。つまり皮膚の土地、スキンランドです。私たちの会社にとってこの場所は会社のコンセプトそのものを体現する場であり、思想そのものです。私たち4人以外に入ることが許されず、時には数か月もここで野営をしスキンの精神の再構築を試みます。地面には巨大な毛が生えていたりするので、それを抜いたりして夜を過ごします。先ほども申し上げた通り入念なりサーチを行い、スキナーゲットが決まると、車でこの土地を疾走し十分な速度に達した際にスキン・トランスファー・エフェクトを起動させることで車はイボの様な凸にぶつかって吹っ飛び、スキン・ドロップ・ホールを一時的に生み出します。車ごとそのホールに突入することで異なる時空間に存在するスキナーゲットの半径 50キロ圏内に到着します。今回の移動の際に何かしらのエラー・スキン・ファクターが混入したことにより、到着時メンバーの一人が肉ドーナツ化してしまっていました。まだ研究中ではありますが、スキンホールに入り込む際に肉ドーナツ化したメンバーが乗車をしていたことが原因であるのではないかと我々は推測しています。ホールの中に存在するスキナーゲットのひだに顔が引っ掛かっていたのを見た、と他のメンバーが話しているためです。こういったことが起こり得る可能性はかなりあるという事をわが社の研究員も以前より指摘はしていましたが、実際に起こったのは今回が初めてでした。

人間というものは皮膚に覆われていると、ついついそう考えてしまいがちですが、実際は体内、つまり口から肛門にかけても、

